ヘブンリー・ブルー

なつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ヘブンリー・ブルー

【Ｎコード】
Ｎ８４４６Ｑ

【作者名】
なつき

【あらすじ】
青をみる話です。どこまでも青い。

1

わたしは神さまなんか信じてないし、だから天国というものも信じていない。幸福というのは自分自身の手で掴み取るものであって、決して誰かに与えられるものではない。そんな幸福なら、わたしは要らない。わたしはわたしの足で立って生きてゆく。

でもニンはかつて、興奮した口ぶりで、しかしゆっくりと、噛み締めるように語った。あれは確かまだ、わたしたちがランドセルを背負っている季節。わたしたちは、学校のプールからの帰り道を歩いていた。蝉がけたたましく鳴く、あれは夏の終わりだった。

「天国って、あるんだよ、本当に。あたしね、見たの。夢見るでしょ、寝て、そんときにねぇ、見えた、はっきり見えた。きれいだったよ、ずーっと海でねぇ、海と空しかなくってねぇ……きれいな青だったよ。あの青、なんて言うんだろう。あんな青、天国にしかないもんねぇ」

ふうん、とわたしは言っただけだった。とくにその話に興味をおぼえなかったし、それに他人の他愛ないお喋りを暖かく受け止めるには、まだ幼すぎた。

ニンは楽しそうにわたしにきく。

「ねえ由美ちゃん、神さまっていると思う？」

「……いないと思う」

するとニンは、じっと黙り込んでしまった。何の前触れもなく、唐突に。小さなころからの、ニンのくせだ。考え込むと、黙り込む。

神さまは、いない。それは小学生のわたしに芽生えていた、微かな、しかしはっきりとした確信だった。だってもし、もし神さまがいるのなら、この世界はもっと平和なはずじゃないか。神さまを信じる人のことを、ばかだな、とわたしは感じていた。

しばらく黙って歩いた。頬をつたう汗、蝉の鳴き声、眩しすぎる太陽。嫌になるくらい、夏だった。

ニンは、ふと思い出したように話し出す。今度は速く、勢いよく。
「でも神さまっていると思うよほんとうに。だって天国があるなら神さまもいるよ。きっといるよ。神さまは、いるよ」
「いないよ」
返したわたしの声は、気だるげに響いた。
「いるよ」
ニンは、むきになって言う。
「いないでしょ」
「いるいる」
わたしたちは何度か言いあい、そしてやがては沈黙してしまった。蝉の鳴き声が、沈黙の膜の外で鳴り響く。
蝉の鳴き声の余韻をもって、この記憶は終わる。すうっとフェイドアウトして、意識は今に戻ってくる。
わたしは姿勢よく座ったまま、教室の小さな窓から見える空を見ていた。ぼうっとぼやけた空。春だ。
いまだに思う。空はどこまでも青くて、とてもうつくしいけれども、でもだからってあそこに天国があると考えるのは、やっぱり短絡的だ。
「高坂」
教師に名前を呼ばれて、はい、と返事する。数式を書けとのことだった。
わたしは立ち上がり、背筋をぴんと伸ばして黒板のほうへ向かい、チョークを手にとって数式を書き始める。あくまでも、落ちついて。穏やかに。スマートに。わたしは優等生の高坂さんだ。いつでも優等生らしく振舞わねば。チョークのたてる硬い音を、教室じゅうが聴いている。
「おお、よく出来たな。さすがは高坂だ。結構難しいんだがなぁ。よし、いいぞ」
わたしは口もとで微笑み、静かに黒板から離れ、席につく。
教師の解説を聞き流しながら、思う。

学校というのは牢獄に似ている。同年代の人間が、ひとつの空間に押し込められている。そこは不自由で不平等で、でもだから、自分の実力でどうともなる世界だ。不平等なら、優遇されるがわにいればいいのだ。優等生という地位を手に入れたわたしにとっては、とても快適な場所。うまくやれば、そのぶん返ってくるものがある。

なのに。

黒板のずっと向こうがわの教室で、同じように授業を受けているはずのニンのことを思う。意識はまた、過去と溶けあう。

最近よく、あの夏の終わりの会話を思い出す。とても些細で小さな出来ごとなのに、でも何故か、鮮明に蘇る記憶。

ニンが、あまりに幸せそうだったからかも知れない。天国という存在を信じ、神さまという存在を信じて、あのときのニンは、確かに幸せそうだった。

空は、青い。でもこれは現実の青。決して、天国の色ではない。

2

ニンの本名は、安田春奈という。でも私はずっと、ニン、と呼んでいる。小学校三年生の秋にニンが転校してきて知りあってから、ずっと。

出会いたてのころ、わたしは笑顔で顔を固めてこうきいた。椅子に座ったニンを、見下ろすような格好で。

「安田さんのこと、何て呼べばいい？」

ニンはすこしのあいだ視線を俯けて足をぶらぶらさせていたが、やがて真顔でこう言った。

「ニン」

「ニン？」

わたしは笑顔のまま、きき返してしまった。

「にんじんのこと」

そのときのわたしの理解力は、その言葉の展開に追いつかなかった。

「え、それ、どういう意味なの？」

するとニンは、机のなかをごそごそとやって筆ばこを取り出し、わたしに見せた。

そこにはにんじんのキャラクターのストラップがついていた。やる気に満ち溢れた顔をしている、でもだから滑稽にも見えるにんじんのストラップ。

「にんじん、好きなの」

ニンは言い、歯を見せて笑った。そこでわたしは了解した。そしてそう望むのならば、そう呼んでやろうと思った。べつだん拒否する理由もないし、それにそっちのほうが都合が良い。

ニンは肌の色が濃くて、背が小さくて、眼鏡をかけていた。それだけで充分にからかいの対象になり得るのに、その上いつもきょろきょろとしていて、貧乏ゆすりをしていて、爪をかむくせがいまだ

に抜けていなかった。三年生にもなるのに幼稚園の子みたい、と思ったことをおぼえている。

わたしは、ニンを押しつけられるかたちでニンとのつきあいを始めた。担任教師が、何かあるたびにわたしとニンをくっつけたのだ。体育の時間、校外学習、校内フェスティバル。「高坂は、頼れるからなぁ」それは彼の、純粋な思いやりだった。

酷いことをする、と思った。もしわたしだったら、転校して、そこで教師が友達をこしらえて渡してきたりなんかしたら、ぜったいに嫌だ。

でもニンは、そんなことぜんぜん気にしていなかった。というよりか、そのことに気がついてすらいないようだった。

由美ちゃん由美ちゃん、とニンはわたしに懐いた。それはひとえに、わたしの完璧な心配りによってだろう。わたしは小学三年生にして、優等生を演じることに慣れていた。

わたしは、ニンといることが嫌ではなかった。ニンといると、周りの人たちがみんな私のことを褒めたからだ。遠まわしに、しかしはっきりと。「高坂さん、偉いわねぇ」「由美ちゃんって優しいよね」ニンと行動を共にすることで、わたしの評価はますます上がっていったのだ。鈍くさい安田さんとつきあってあげている、優しい優しい高坂さん。

そうこうしているうちに、わたしの隣にニンがいることは、自然なこととなった。教師の配慮だろう、その後のクラス替えでニンとクラスが分かれたことは、一度もなかった。わたしは他の友人たちとのつきあいもこなしながら、ニンとも仲良くした。でもニンの仲良しは、わたししかいなかった。

ずっと一緒にいるニンに対して、愛情に似たものが生まれたのは確かだ。しかしその愛情の正体はもしかしたら、優越感、と呼ばれるものだったのかも知れないと、最近では思うようになった。

3

起立礼、が済んだ途端、教室はクレッシェンドで騒がしくなる。これからお弁当の時間だというのだから、無理もない。一瞬の解放。

数学の道具を机のなかにしまいながら、ふと教室のドアのほうを見ると、もうニンはそこに立っていた。にんじん柄のお弁当箱を、ぎゅっと握り締めて。勝手に入ってきたって構わないのに、ニンはぜったいに、いいよ、とわたしが言うまで入ってこようとしない。

わたしは数学の道具をすっかりしまい込んでから、ニンのもとへと歩く。

「いいよ、入りなよ」

するとニンは、にかっと笑う。にかっと。ニンの笑いかたには、その表現がとてもよく似あう。

わたしの席は、窓ぎわの後ろから二番めにある。空が窓いっぱいに見えて、ぼんやりするのにちょうど良い席。そんなわたしの席で、わたしとニンはいつもお弁当を食べる。

前の席の子の椅子を借り、ニンはわたしの机のうえにお弁当を置く。どん、とつよく置く。そして不器用な手つきで布をほどいてゆく。そんなニンを見ながら、わたしは思う。

ニンは、自分の教室に友人がいないのだ。言われなくても、態度でわかる。だって友人がいるとしたら、どうして別のクラスのわたしのところにお弁当を食べに来るんだ。

もちろんわたしは、教室で友人をつくった。反対がわの教室の隅、廊下がわの一番後ろでお弁当を食べている、ゆりちゃんと西ちゃん。彼女たちは今も、おっとりとお喋りに興じているようだった。わたしは普段、彼女たちと行動を共にしている。

でも、ニンには行き場がない。わたしがいないと、この学校のどこにも居場所がない。十分休みや、授業中は仕方ない。でもお昼休みにとり残されるというのは、さぞかし惨めなことだろう。わたし

はニンを、あわれに思う。だからニンと、お弁当を食べてやる。
もたもたと食事の準備をするニンを待って、わたしたちは、いただきます、と手をあわせた。
鳥のから揚げを頬張りながら、ニンは言う。
「いただきますって、大事だよ」
「食べてから喋りなよ」
うん、とニンは頷き、勢いよく顎を動かす。ニンの、こういうところがみっともないのだ。
「あのね、おばあちゃん言ってた。いただきますは大事だって」
「そうなんだ」
「うん。おばあちゃん、そう言ってたよ」
「生きものに感謝を捧げる、って？」
「たぶんそう、とにかく、大事だって」
わたし達は、いつもこうして他愛のない話をする。ニンの話には、とりとめがない。繰り返しが多く、論旨もよくわからない。でもわたしは、それにつきあうことに慣れている。何せもう、四年のつきあいだ。
ニンは懲りずに、今度はたまご焼きを頬張りながら言う。
「あたし、授業、つまんない。わかんないんだもん」
「食べてから喋りなって」
「うん、……、食べた。さっきね、理科だったんだけど、アミラーゼ？　とかよくりょうたい？　とかよくわかんないよ」
「……葉緑体のこと？」
「そうそれ。由美ちゃんやっぱ凄いなぁ」
「勉強って、わかれば簡単だよ」
こうやって言うのは、とっても気もちの良いことだ。意地悪な快感。
「だってわかんないよ。つまんないし」
「そう？」
「でもさぁ、小学校のときは良かったよね。実験は、楽しかったな

ぁ。ロボットつくったりさ。あの頃に戻りたいよ」
「わたしは結構、中学も楽しいけど」
するとニンは、黙り込む。ニンは、共感が欲しいのだ。そんなこと、わかっている。わかっているから否定するのだ。これも、意地悪な快感。
ニンは手を止め、ぽつりと言った。
「なんか、中学って、つまんない」
「そう？」
わたしは言葉で一蹴する。するとニンは拗ねたように唇を曲げ、不機嫌そうに俯いた。わたしは構わず、お弁当を食べつづける。教室の喧騒を、何とはなしに聴きながら。
そうして、わたしのお昼休みは消費されてゆく。

4

今日もニンは、わたしの教室にやって来る。わたしはそのたび、ニンをドアのところまで迎えに行かなければならない。そしてニンは、必ずにかっと笑うのだ。どこまでも心を許した、小さな子どものように。

お弁当を食べながら、わたし達は話す。

「由美ちゃん、今日あたし、結構勉強出来たかも」

「へぇ。何かあったの？」

「小テストでねぇ、数学の、三十点くらいとれたよ」

「……あ、そうなんだ」

とくに期待はしていなかった。ニンは、勉強が出来ない。しかしそれにしても、酷い点数だ。わたしはそう思ったが、口には出さない。

そもそも、勉強が出来ない、ということが、わたしには理解出来ない。あんなの、何も難しくない。決められたことを、決められたとおりにやるだけだ。なのに何故、ニンのような落ちこぼれが出てくるのだろう。

ニンは興奮したのか、箸をもったまま手振りをつけ、大きな声で話す。

「あたしねぇ、ちょっと、嬉しかった。だって、そんな点数なかなかとれないもんね。嬉しいよ。由美ちゃんは出来るから違うかも知れないけど、あたし、あんまり勉強って得意じゃないし、」

「ニン、もうすこし声小さくして。目だってる」

恥ずかしかった。とにかく、恥ずかしかった。周囲からの視線を、はっきりと感じるのだ。そこにはおそらく、どうして高坂さんがあんな子と、という思いも含まれているはず。

しかしニンはそんなこと考えもせずに、また不機嫌そうに唇をとがらす。

「何でぇ。いいじゃん。そんなに大きくないし、べつにあたし、そんなにテンション高いわけじゃないし」
「みんなに聞こえるから」
えー、とニンは言い、そのまま黙りこくってしまった。そのあとは何となく気まずく、わたし達は、黙々とお弁当を食べた。
しかしニンは、ふいに言う。
「でもさ、三十点ってほんと、はじめてだよ」
うん、とわたしは頷いただけだった。ただひたすら、恥ずかしかった。ニンの隣にいることが。
ニンの存在は、わたしのクラスメイトたちからすれば異質でしかない。べつのクラスにいるのに、何故だかお弁当を食べに来る子。しかも勉強が出来ず、挙動不審ぎみで、べつだん可愛くもない。クラスメイトたちの視線を、わたしはますます意識するようになっていた。そしてその視線は、明らかに、冷たいものだった。
小学校のときは、まだ良かった。クラスが一緒ならば、面倒を見てあげている、という構図を、クラス全体に理解してもらえるからだ。しかしクラスがべつだと、そうはいかない。同じ小学校出身の子は、まだ良い。べつの小学校出身の子には、もしかしたら、わたしまで変わり者のように思われているかも知れない。そう思うと、胸がすっと冷める。
「確かに由美ちゃんは勉強出来るけどさ、あたし、苦手だし。だからあたしにとっては、凄いっていうか、三十点でも、」
そのとき、三十点、という声がしたのをわたしは聞き逃さなかった。男子の、嘲るような声。直後、嫌らしい笑い声が漏れてくる。三十点、ともう一度声がする。ニンもそれに気がついて、口をつぐんだ。唇を曲げ、俯いて言う。
「男子、うざい」
「そんなもんだよ」
わたしは冷たく言い、せっせとお弁当を食べた。今自分がどう見られているか考えると、顔が火照りそうになる。いつもニンとお弁

当を食べているから、わたしはきっと、ニンと同類に思われているのだろう。そう思うと、たまらない気もちになった。

ニンがあわれなのは、ほんとうだ。でも、わたしにはわたしの生活がある。こういったことがつづけば、わたしはクラスでの地位を、失うかも知れない。

もちろんそんなことは、言わない。わたしは平静を装い、黙々と箸を動かす。ニンと自分の生活を、天秤ばかりにかけながら。

5

「由美ちゃん、行こう」
顔を上げると、そこにはゆりちゃんと西ちゃんの笑顔があった。わたしはすぐに微笑み、うん、と返事をして、筆ばこと技術の教科書を取り出す。六時間め、次の授業は、技術室で行うのだ。その間彼女たちは、「最近暑いね」「ねぇ」と、にこやかに話していた。
廊下を、三人で歩く。ゆりちゃんと西ちゃんは出身小学校が一緒で仲が良いから、二人が前を歩き、わたしはそれについてゆくかたちになっていた。でも二人は人間が出来ているのだろう、後ろを歩くわたしにも、こまめに声をかけてくれる。
「やっぱり暑いね」
ゆりちゃんが言う。
「ほんとに。でも、もうすぐプールだよね」
西ちゃんが答える。
「ねー。由美ちゃんは、プール好き？」
こうしてわたしに、話を振ってくれるのだ。わたしは安心しながら、言う。
「まあまあかな。でも、水着見られるのが、ちょっと嫌かも」
「あー、わかる！」
「男子いるもんねー」
こうしてわたし達は、プールと水着と男子の話で盛り上がる。技術室には、すぐに到着してしまう。
しん、としている。どうやらわたし達が、一番乗りのようだった。木の香りが鼻をくすぐる。技術室の席順は、自由だ。わたし達は壁ぎわの、前から二番めのテーブルに座った。ゆりちゃんと西ちゃんが横に並んで、わたしはテーブルを挟んで壁ぎわに。木で出来た大きなテーブルは、触るとざらざらとする。
時計をちらと見ると、休み時間が終わるまで、まだあと七分あっ

た。七分。その間ゆりちゃんと西ちゃんと話して、さらに仲を深めることが出来る。クラスに同じ小学校出身の仲良しがいないわたしにとって、二人は命綱だ。それに加えて、わたしはゆりちゃんと西ちゃんに好感をもっている。下品に笑うこともなく、崩れた言葉をつかわず、男子に媚びることもなく、どこか雰囲気が大人なのだ。同い年なのに、ニンとはぜんぜん違う。

さあ何を話そう。そう思って話題を探り始めたとき、西ちゃんがゆりちゃんに言った。

「ねぇゆり、今言う？」

「そうだね。今ならちょうど良いかも。……ねぇ由美ちゃん」

わたしは身構える。いったい何を言われるのか。自分だけ疎外されている秘密は、おそろしいものだ。じわりとした恐怖を感じる。

しかし、ゆりちゃんは意外にもこう言った。

「お弁当、わたしたちと食べない？」

わたしは思わず、えっ、とすっとんきょうな声を出してしまった。予想していない言葉だった。

ゆりちゃんはつづける。

「あ、もちろん、安田さんと食べてることは知ってるよ。でも、その、何て言ったら良いのかな、西」

「つまりだからね、この際ぶっちゃけちゃうけど、」

西ちゃんは、身振りを交えて話す。

「由美ちゃん、何で安田さんとお弁当食べてるの？」

決定的な質問だった。わたしは一瞬沈黙したあと、当たり障りのないニュアンスで言う。

「同じ小学校だからさ。何て言うか、わたしをずいぶん、頼ってるみたい」

「でもそれってはた迷惑な話じゃない？」

西ちゃんは、顔をしかめて言う。

「確かに小学校の縁があるってわかるけどさ、今って中学生活スタートした大事な時期じゃん。クラスでもうまくやりたいじゃん、ね

え？」
ゆりちゃんは、真剣な目をして言う。
「由美ちゃんには、新しい生活をやる権利があると思う」
そして二人は、わたしをじっと見る。わたしは二人の間の空間に視線を据える。
中学生活、新しい生活、そしてわたしの、権利。それらの概念は、近ごろのわたしの頭のなかをぐるぐると巡っていたものだった。それを見事に言い当てられたことに、驚いていた。見る人はちゃんと見ているのだなぁ、と。そしてやっぱり、この二人は頭が良いのだなぁ、とも思った。
天秤ばかりが、揺れ始めた。
ゆりちゃんは、落ちついた声で言う。
「もちろん無理にとは言わないけど、でも、わたし達はぜんぜん、由美ちゃんのこと歓迎だから」
西ちゃんが、そのあとを引き継ぐ。
「やっぱりさ、正直な話、友達は選んだほうがいいって。こんなこと言いたくないけど。由美ちゃんもったいないよ」
天秤ばかりは、傾いた。かくん、とあっけないほどの音をたてて。
わたしは頷き、ありがとう、とにっこり笑った。それですべては、決定した。

6

ニンはいつも通りに待っている。にんじん柄のお弁当ばこをもって、ドアの前に佇んで。男子がドアから出てゆくのを、たどたどしく避ける。肩がぶつかり、ニンはお弁当ばこを落としてしまう。ニンは慌ててしゃがむ。しゃがむと、スカートの裾がほつれているのがわかる。

わたしはそんなニンに近づき、見下ろした。背中のベストには、汚れが目だつ。やっぱり正解だった、とわたしはぼんやり思う。だってこうして見ると、やっぱりニンは、みっともない。

ニンは立ちあがり、あ、由美ちゃん、と嬉しそうに言った。

「入ってもいい？」

「あのね、ニン、」

すぐ後ろには、ゆりちゃんと西ちゃんがいる。勢いを失わないうちに、言ってしまわなければ。

「今日からわたし、ゆりちゃんと西ちゃんとお弁当食べるから」

ニンと視線をあわせるのは、さすがに無理だった。わたしはニンの胸元に視線をやり、反応を伺う。泣くか、喚くか、最悪意味を理解しないか。

しかしニンの反応は、予想外のものだった。

「わかった」

平気な調子でそう言うと、くるりと背を向け、去っていったのだ。あまりのあっけなさに、残されたわたしのほうが呆然としてしまった。一応は、覚悟を決めて言ったのに。わたしはしかし、何でもないようすでお弁当をもって、ゆりちゃんと西ちゃんのそばに行った。とにもかくにも、ニンにはきちんと言ったのだ。

ゆりちゃんと西ちゃんと過ごすお弁当の時間は、楽しかった。話があうし気も配ってくれるし、とっても快適だ。それに食べかたも上品。

でもわたしはずっと、ニンの笑顔が頭から離れなかった。くしゃっと笑う、顔いっぱいの笑顔。見慣れているはずのその笑顔が、今日はべつの色あいをもってわたしの目の裏にこびりついた。

その日の放課後、しかしニンは、いつも通りに待っていた。玄関のそばのベンチに座り、膝のうえにぎゅっと拳を固めて。

わたしは下駄ばこの暗がりに佇んで、ニンの姿をしばらく眺めていた。ニンは俯いて、貧乏ゆすりを繰り返している。時おり手の甲で、顔をごしごしとやる。相変わらずだ。

わたしはすこし迷ったあと、息を吐いて光のもとに出た。陽ざしに目が眩む。

「ニン」

ニンはくるりとこちらを向き、ぱぁっと笑った。混じりっけのない笑顔。

「由美ちゃん」

どこまでも屈託のない声。さすがにすこし、苦しかった。息を吸うたび、じわりと胸に染みてゆく。

ぽつりぽつりと、当たり障りのないことを話して帰った。授業のこと、先生のこと、掃除のこと。ニンはそれらについて、面白くない、と自分の感想を述べる。場合によっては、悪口もつけ加える。わたしはそれを、今日は否定しない。

ニンはいよいよ、お昼休みのあの件には触れなかった。別れるときまで、ニンは終始笑顔だった。ばいばい、と大きく手を振って、わたしに背を向け住宅街へと消えていった。小さな背中に、夕陽が当たっていた。

7

三人でお弁当を食べるのも慣れてきたある日、昼休みの喧騒のなか、ゆりちゃんは言い出した。
「ねぇ由美ちゃん、由美ちゃんって部活入ってないよね」
「うん、なんか、入り損ねちゃって」
それはほんとうだった。とくにめぼしい部活がなかったし、それにニンと共に帰れなくなるのを、そのときはどこか申し訳なく思っていた。そうして迷ってるうちに、仮入部の期間は終わり、部活はもう確定、という雰囲気になってしまったのだ。
「良かったら、被服部入らない？」
え、とわたしは声を漏らした。お弁当に誘われたときみたいに。ちらと西ちゃんを見ると、西ちゃんも頷き、「入りなよ」と言う。
二人は被服部だ。それは知っている。だからこそ、被服部からはすこし距離を置いてきた。そこは二人の世界で、わたしは立ち入れないと思っていたから。でもこうして誘ってもらえたということは、つまり。
わたしは即座に決断した。
「ほんとに？　じつは部活、入りたかったんだよね。だから、入っていいなら、すごく嬉しい」
嬉しさを滲ませ、あくまで謙虚さを忘れず、わたしは注意深く言葉を選ぶ。
するとゆりちゃんと西ちゃんは、ほんと、と両手をあわせて笑ってくれる。やはり二人は、良い人たちだ。
「じゃあね、今日さっそく活動あるんだけど、来れる？　急すぎるかな？」
「ううん、行く行く」
部活のようすや服づくりの楽しさを、二人からきいた。ゆりちゃんはワンピースを、西ちゃんはエプロンをつくっているようだった。

話をきいているうちに、服づくりそのものに興味が沸いてきた。もともと手芸は、好きなのだ。

なごやかに、わたしたちは盛りあがる。わたしの、新しい日常。わたしの、権利。

わたしはそのとき、ニンのことをすっかり忘れていた。お昼の時間を、ひとりで過ごしているはずのニンのことを。

8

楽しかったね、と言いあいながら、ゆりちゃんと西ちゃんと、夕ぐれの校舎を歩く。被服部からの、帰りだった。

活動は、楽しかった。先輩たちは優しくわたしを受け入れてくれたし、布を切ったり縫ったりすると、とてもわくわくとした気もちになった。それに二人にすこし近づけた気がして、嬉しかった。ゆりちゃんと西ちゃんとは、もっともっと仲良くなりたい。

だからニンのことは、頭からすっかり抜け落ちていた。言ってしまえば、もうべつの世界のものとして。

でも、ニンは、待っていたのだ。

下駄ばこでくつを履き替えているとき、西ちゃんは不審そうに言った。

「……あれ、安田さんじゃない？」

わたしはぎょっとした。まさか、もしかして、何でまだ、いるんだ。わたしは急いでくつを履き、ごめんねすぐだから、と一言断って先に外に出る。

ニンはやはり、いた。いつものベンチにいつものように、足をぶらつかせてそわそわして。

「ニン」

呼んだわたしの声は、非難のように響いた。ニンは振り向き、笑う。いつも通りに。

「何でいるの」

ニンは悪びれもせず、言う。

「由美ちゃんを待ってたんだよ」

「だってこんな時間じゃない」

うん、とニンは言って、すこしの間考え込む。そして混じりけのない瞳で、言う。

「でも、由美ちゃん待ってたから」

背後から、由美ちゃん、と呼ばれた。どうする、うちら、先帰ってようか。冗談じゃない。わたしは振り向き、今行く、と返事して、ニンのほうに向きなおった。

「そういうことだから」

ニンはぽかんとして、首を傾げる。

「だから、わたし今日から、ゆりちゃんと西ちゃんと帰るから」

それだけ言って、わたしはニンに、背を向けた。

帰り道、談笑しながら、思った。気もちの悪さを、まったく感じないわけではない。罪悪感めいたものも、あるにはある。でも話していて、ニンよりはるかに楽しいのだ、ゆりちゃんと西ちゃんは。まず、レベルってものが違う。人としてのレベルが。わたしは、わたしに相応しい人たちとつきあいたい。

だからこれでいいのだと、帰り道じゅう思っていた。顔では笑いながら。つよく、言い聞かせるように。

9

それでもわたしは、ニンとの登校をつづけた。だってニンは、毎朝待っているのだ。わたしの家の前、電柱のそばの柵に座って。髪もろくにとかさず、恥らうようすもなく目をこすって。

ニンはやたらと、楽しそうに話すようになった。しかし話題は、悪口や噂話ばかりだった。以前からニンは悪口を言うたぐいの人間ではあったが、前にもまして、増えた。何とかちゃんがね、何とかくんがね……わたしは決して、共感を示さなかった。ただ曖昧に頷くだけだ。悪口につきあうと、ろくなことにならない。それに、自分のレベルも落とすことになる。

大声で人を悪く言うニンは、やはり、人としてのレベルが低いのだと思った。唇はいやらしく曲がり、目は嘲ったような、なのに媚びたような色をしていて。

同じ制服を着た生徒たちが増えてくるにつれ、わたしは内心、おびえる。ニンの隣を歩いていて、何か思われはしないか。何か言われはしないか。もちろんそんなこと、顔には出さない。わたしはいつだって、平然とした顔でものごとをやり過ごす。

「それでねぇ、高木くん、真由ちゃんのことが好きなんだって！びっくりしたよ、まさかだよね」

そうなんだ、と返す声は、しかし冷たさを隠しきれていない。

やはりわたしは、呆れていた。ニンという人間に、そしてそのレベルの低さに。勉強もろくに出来ず、みっともなくて、他人のことを平気で悪く言って。何と言うか、品格がないのだ。

人はつきあう友達によってわかる、という言葉を、英語の例文で読んだことがある。ゆりちゃんと西ちゃんを見ていると、それはほんとうかな、という気がする。

わたしは自分を、おとしめたくない。だからニンとのつきあいも、よく考えなければいけない。

その間にも、ニンは隣でしゃべり散らしていた。あることないこと、野次馬根性で。そうこうしているうちに、学校についた。わたしはほっとする。わたしの、ほんとうの日常が存在する場所。ニンとかかわりをもたなくても良い、わたしの新しい社会。

わたしたち一年生のフロアにつくと、わたしはそそくさと自分の教室に入る。まわりの視線を気にして、誰も見てないとわかると、ほっとして。自分の臆病なのが、嫌だった。でも、仕方のない面だってあると思う。だって。

ゆりちゃんと西ちゃんとにこやかに挨拶を交わし、わたしはやっと、安心する。

10

教室でのニンをはじめて見たのは、プール開きの日だった。かんかん照りの太陽、べっとりと肌にまとわりつくブラウス。

ニンの教室は、校舎の端っこにある。わたしはふだん、そちらのほうへは決して行かない。べつだん用がない、というのはもちろんあるが、何よりニンとはちあわせたくなかったからだ。

でもプールに行くには、どうしてもニンの教室の前を通らなくてはいけない。校舎が、そういうつくりになっているのだ。

あくまでも、平然とした顔で通り過ぎよう。わたしはそう決めていた。

体育着姿でプールのバックを抱え、わたしたちはプールへ向かう。ぺたんぺたん、とはだしの足が鳴る。なんか気もち悪いね、と笑いあった。三人で笑うことは、もう自然なこととなっていた。

だんだんと、ニンの教室は近づいてくる。二組の前を通り過ぎ、つぎは三組の前、そして。教室がわを歩くわたしは、窓ぎわを歩く二人に視線を向け、そのまま通り過ぎようとした。

しかしそのとき、大声が響きわたった。女子の、甲高い笑い声。

「マジウケるんだけど」

無視できないほどに大きくて、無視できないほどに人を見下した響きだった。でもわたしたちは、わたしは、歩みを止めない。

とても、嫌な予感がした。

つぎは笑い声が起こった。弾けるような笑い声。やばあ、ちょっといいのー、ねえこいつ、ウケるよ、えー、おもしろ。そんなとがった言葉たちが、つぎつぎに飛びかう。

わたしたちは、もうすぐ正面のガラス戸から外に出るところだった。明るい明るい、光の世界。

振り向いちゃ、だめだ。確認しちゃ、だめだ。

そう思ったのに、言い聞かせたのに、

わたしは、振り向いてしまった。
すべては一瞬のことだった。でも、すべてが、細かいところまで見えた、見えてしまった。
気のつよそうな女子が、教室のまんなかの机のうえに、威圧感たっぷりに座っている。机のまわりには、女子がうじゃうじゃと集まって、嫌らしい笑いを浮かべている。その机のうえには、にんじん柄の筆ばこがあって、そして、やっぱり、ニンがいた。困っているはずなのに、くしゃくしゃに笑って、その笑みを、ひたすらに固めて。
ああ、とわたしは思った。ああ、やっぱり。
わたしはしかし、すぐに視線をそらして、プールへと向かった。
さんさんと、眩しすぎるほどに光が降り注ぐ午前だった。

11

淘汰、だ。

きらきらときらめく水面を見つめながら、思う。

淘汰、という概念を、この間の国語の授業で知った。いらないものは、なくなってゆく。なくなる過程の間に、さまざまな反応が起こる。

それはたぶん、真理だと思う。だって、教室はそうだ。淘汰、の世界だ。いらない人間は、消えたみたいになるか、もしくは強者の、餌になるかのどちらかだ。

そして、ニンは。

ぴっ、と笛が、高く鋭く鳴った。水につかって待機していた女子たちは、一斉に泳ぎ出す。水がかきわけられる。しずくが飛んできて、ざばぁざばぁと音をたてて、気だるくて、どうしようもないプールの時間。水着が身体を締めつける。

「ぼうっとしてるね、由美ちゃん」

ゆりちゃんが隣にやってきて、おっとりと話しかけてくる。配慮に満ちた、穏やかな声。

「ちょっと考えごとしちゃって。水見てると、なんだかぼんやりしちゃうんだよね」

「ああ、それ、わかるよ。わたしもたまに、ぼうっとしちゃう。とくに授業中とか」

「あー、わかる」

わたしたちはそれから、泳ぐ人たちを眺めていた。今は女子の順番で、六人ずつコースに並び、笛の音と共に泳ぎ出す。それが何回も何回も繰り返される。自分もあの流れのなかのひとつなんだ、と思うと、なんだか不思議な気もちになる。

ゆりちゃんとの沈黙は、気づまりなものではなかった。ゆったりとした、心地良い沈黙。いつの間にかゆりちゃんとこんなに仲良く

なれたんだ、そう思うと、嬉しかった。
やがて泳ぎ終わった西ちゃんがやってきて、わたしたちは三人になった。いつものように。そしてプールのほうを眺めながら、他愛ない話をぽつりぽつりとした。平和な時間だった。
わたしはしかし、ずっとニンのことを考えていた。と言うよりか、ニンのことを思っていたというほうが正しいかも知れない。爆発するような笑い声のなか、硬直した笑みを浮かべるニン。
西ちゃんが、ふいに言った。
「あ、桂さん泳ぐよ」
桂さん、というのはすらりとしていて、スポーツが万能の、三組の女子だ。おまけに勉強もできて美人なので、みんなの憧れの的になっている。西ちゃんも、そのうちのひとりだ。
「桂さん、やっぱ細いよねー」
西ちゃんは、感心して言う。そうだね、とわたしとゆりちゃんはあいづちをうつ。
桂さんは三コースにいて、その隣、四コースには同じく三組の白岩さんがいた。白岩さんは、きょろきょろとせわしなく辺りを見わたしている。顔には相変わらず、そばかすがたくさんある。それにお腹がちょっと、出ているみたいだ。白岩さんについて、わたしたちはとくに何も言わない。
ぴっ、と笛が鳴った。六人の女子は泳ぎ出す、と思ったら、白岩さんは、出遅れた。はっとしたように、慌てて水を蹴って泳ぎ出す。ずいぶんともたついた、不器用な泳ぎかただった。
白岩さんは、追いつけそうもなかった。桂さんは既に、コースの後半に行っている。他の女子たちも、コースの真ん中には辿りついている。白岩さんは、もたもたと水をかき分けている。
「桂さん、速い」
西ちゃんは、嬉しそうに言う。
桂さんは、ゴールした。桂さんすごぉい、と歓声が飛ぶ。他の女子たちも、つぎつぎと後につづく。あっという間に、プールには白

岩さんだけが残された。
白岩さんは、まだコースの真ん中にいる。顔を真っ赤にして、ぜいぜい言いながら泳いでいる。がんばれぇ、とおどけた声が飛び、その後ひそひそとした笑いが起きた。馬鹿にしたような笑いだった。白岩さんは、がむしゃらに泳ぐ。みっともない姿だった。
ほら。
わたしは、思わずにはいられない。
ほらやっぱり、淘汰の社会だ。
生き残るか、生き残らないかなのだ。学校という社会で、人権を得られるか得られないか。何をしてでも手に入れられれば、それで良い。だって得られなければ、悲惨な生活が待っている。ひいひいと独りで泳いでいる白岩さんのように、そして、ニンのように。
息苦しかった。どうしてだかは、わからない。罪悪感とか後悔とか、一言で言い表せるものではない。でもとにかく、水の香りのする空気を吸うたび、胸にきつく刺さった。
白岩さんは、まだ泳いでいる。みんなはそれを、見下ろしている。それぞれのやりかたで、それぞれの残酷さをもって。

12

ニンについての話をもちかけてきたのは、意外なことに、ゆりちゃんだった。

六月も最後の、じとっと湿った放課後だった。体育委員会に行っている西ちゃんを、ゆりちゃんと二人で待っていたのだ。

教室に残っているのは、わたしたちだけだった。みんな雨が降ると判断して、はやばやと帰っていったのだろう。雨降らなければいいね、と二人で話していた。机に腰かけて。優等生のわたしたちだって、教師の目がなければこれくらいはする。

話が区切りよく終わると、ゆりちゃんは、ふいに沈黙した。唇を結んで、長いまつげを伏せがちにして。ゆりちゃんはふだん、いつもにこにことしていて頭の回転も速くって、こうして考え込むことはめったにない。と言うよりか、わたしは考え込むゆりちゃんを見たことがなかった。たん、と時計の針が進んだ。わたしはおずおずと切りだした。

「どうかしたの、ゆりちゃん?」

「うん、あのね……」

躊躇したように答えるゆりちゃんは、まだ視線を俯けていた。さまになるなぁ、とわたしはぜんぜん関係のないことを思う。そしてゆりちゃんは、決心のついたように顔をあげ、わたしを真剣な瞳で見つめた。

「あのね、由美ちゃん、気を悪くしないで欲しいんだけど」

「うん」

言葉でこそ何ということなく返したが、内心ではそのふだんと違う迫力にすこし驚いていた。

ゆりちゃんは、はっきりと言った。

「安田さんと学校くるの、止めたほうが良いと思う」

予想外だった。わたしはびっくりして、ただゆりちゃんを見る。

ゆりちゃんは、間髪入れずにつづけた。
「安田さんのことをね、悪く言うつもりじゃないんだよ。そうじゃないんだけど、わたしね、一組の子から聞いたの。安田さん、ちょっとクラスでの立場が危うい、って」
胸が、ひやっとした。ここ最近ニンのことを考えるたびに感じる、このひんやりと冷たい感じ。
「やっぱりね、前も言ったと思うんだけど、由美ちゃんには、新しい生活をやる権利があると思うの。小学校の縁はね、それは大事だと思うんだけど、でも、中学にきたらまた世界が広がるし、そこでの生活があると思うの」
わたしは、うん、とあいづちをうつ。その通り。その通りだと、わたしも思う。だからわたしは、ニンから離れた。
「このままだと由美ちゃんの立場まで、危うくなっちゃうかもしれないって、思っちゃうの。だってあんまり、良くは思われないだろうし。だからもう、ここできっぱり、距離を置いても良いと思う。そっちのほうが、由美ちゃんのためだと思う」
うん、とわたしはもう一回言う。そして、そうだよね、とも言う。そうだ、ほんとうに、その通りだ。
ぺたんぺたんと足音がして、わたしたちは反射的に振り向く。教室に入ってきたのは、西ちゃんだった。
ゆりちゃんは、ほっとしたように言う。
「なんだ、西」
「なんだってなに。え、なにこの空気、なんか話してた？」
「安田さんのこと」
西ちゃんはそれを聞くと、ああ、と納得したように言って、ゆりちゃんの隣の机に腰かける。
西ちゃんは、足を小さくぶらぶらさせながら話す。
「まあ、でも、だよね。やっぱ、由美ちゃんはもっとこう、ちゃんとした人と仲良くするべきだよ。小学校のこと、引きずる必要ないって」

うん、とわたしは返す。そしてまた、そうだよね、と言う。
すこしの間、沈黙があった。やがて、さぁさぁ、という音に、教室は包まれた。
「雨だ」
西ちゃんが言い、わたしたちは窓の外を見る。さらさらと降る雨。さっきまであんなに不快だった湿っ気は、なぜだか爽やかに空気じゅうを漂い始めた。
「そうだよね」
言ったわたしの言葉は、ぽつりと響いた。わたしは小さく唇を噛んで、そして話し始める。
「ほんとに、ゆりちゃんと西ちゃんの言う通りだと思う。わたしもそうしたほうがいいのかなって、思ってたんだよ。ほんとに。だから、うん、そうしようかなって、思う」
ゆりちゃんと西ちゃんは、微笑む。ありがとう、とわたしも微笑んで言う。それでことは、決まった。
その言葉に、嘘はなかった。ニンと登校するのは、とにかく、恥ずかしい。だからきっかけさえあれば、いつでも止める気ではいた。そのきっかけを、ゆりちゃんと西ちゃんはつくってくれたのだ。
そう、なにも、悪いところはない。万事うまくいった。これで良いのだ、これが自然なかたちなのだ。
そう思うのはほんとうなのに、何でこんなに、胸がぎゅっと痛いのだろう。吸う息が、いちいち刺さってくるのだろう。
「あのね、」
西ちゃんが、呟くように話し出す。
「うちらがこんなに言って、おせっかいかも知れないんだけど、でも、わかるんだ。うちらも、寄生されたことあるんだよ。だから寄生されてる由美ちゃんが、ほっとけなかったって言うか」
ゆりちゃんは、隣で小さく頷いた。わたしは、そうなんだ、と言う。そして、そうなんだ、と思う。寄生という概念をもっている、そのことで、わたしたちはもうわかりあえた。だから力づよい言葉

だった。二人は純粋な思いやりで、こうまでわたしにつきあってくれているのだと思った。そのつよさが、頼もしいと思った。
そう、わたしは、もうこの二人の友達なのだ。だから何も、思い悩むことはない。この二人と中学校生活を送って、この二人と楽しく過ごして、それで良い。まったく、良い。
なのに、そう思ってもどうして、胸の痛みは、いっこうに消える気配がない。
雨は相変わらず、ベールのように細く細く降っていた。あのうえには、空があるはず。まっ青な空が。でもこの灰色の空を見ていると、その青さを思い出すことができなかった。

13

翌朝、ニンはやっぱり、柵に腰かけ待っている。ニンはいつだって、待っているのだ。待たれることって、あるのだろうか。

おはよう、とわたしは声をかける。いつも通りに。ニンは立ち上がり、おはよう、と言ってにかっと笑う。これも、いつも通り。いつも通りの日常。今日限りの、日常。

ニンとの日常が終わるのが、嫌なわけでは決してない。それはわたしの望んでいたこと。いつかはそうしようと思っていたこと。でも、なのに、このひっかかりはほんとうに何なんだ。

しばらく、黙って歩いた。これもいつも通り。ニンといると、沈黙の時間が長い。それは自然な沈黙で、いつもはぜんぜん気にならないのだけれど、今日だけはやけに、気になった。

周りにちらほらと制服を着た人たちがあらわれ始めたころ、ニンは思い出したように噂話を始めた。これもいつも通りのことだ。

話の内容は頭に入ってこなかったけれど、そのリズムと響きは耳にすんなりと流れ込んできた。抑揚が激しくて、どこか幼くて、妙に間延びする。

今日で、お終いだ。

改めて、思う。今日で、ニンとの縁は完全に切れる。一緒にお弁当を食べなくなって、一緒に帰らなくなって、そして一緒に登校しなくなる。そうやって並べてみると、それはとても自然な流れのように思えた。自然消滅、とはきっとこういうことなのだろう。

いいんだ、これでいいんだ、これがいいんだ。

何かを振り払うように心のなかで断言して、わたしは直後口を開いた。

「ねえニン」

「なに？」

話を中断されたニンは、どこか不機嫌そうに言う。わたしは間を

置かず、言う。
「今日で一緒に学校くるの止めない？」
視線を前のほうに据えて、ニンのほうは、見なかった。ニンが沈黙しているのが、わかった。
わたしは勢いのまま、つづける。
「わたしたち、もう中学生じゃん。小学校のときとは違うっていうかさ、やっぱり互いに互いの世界でうまくやるべきだよ」
これは、意地悪だった。互いの世界。わたしには、平和な世界がある。でもニンの世界はそうでないことを知っていて、あえて、わたしは言った。
周りが生徒たちでがやがやとうるさくなりはじめたころ、ニンはぽつりと言った。
「何で？」
「だから互いの自立のためにさ」
これも、そうだ。意地悪だ。自立したいのは、あくまでわたし。ニンの意志は、無視している。
ニンはまた、沈黙した。わたしもかたくなに、沈黙を守る。
やがて学校の目の前の、横断歩道についた。赤信号の前は、生徒たちの制服で紺色一色だ。わたしはまた、不安になる。ニンといることを、変に思われてやしないか。今やニンは、人権を獲得できなかった立場。一緒にいて、何を思われても不思議ではない。
だから、わたしは急かした。
「いいよね」
ニンは、何も言わなかった。わたしはそれを、了承ととった。無理やりに。
校門をくぐり、下駄ばこでくつを脱ぎ、わたしたちは、自然と別れた。何も言葉を交わさずに。一回も、視線をあわせることなく。

14

それからは、何ごともなく過ぎていった。ただわたしの生活から、ニンの存在が消えただけだった。ニンは今やわたしのなかで、過去の存在となりつつある。わたしの現在にいる存在は、ゆりちゃんと西ちゃんだ。

たまに、ニンの噂を聞いた。それはゆりちゃんからだったり、西ちゃんからだったり、またはクラスメイトの噂話からだったりした。ニンはやはり、すこしずつ転落しているようだった。でもわたしは、それらの話を意図的に無視した。わたしにはもはや関係のないことだ、と。

そうこうしているうちに期末テストが始まり、期末テストが終わると、あっという間に夏休みがきてしまった。

夏休みは、楽しかった。被服部の活動が、何回かあった。わたしたちは夏祭りに向けて浴衣をつくって、じっさいそれを着て、夏祭りに出かけた。花火がきれいだった。夏祭りが終わると、文化祭に展示するためのワンピースをつくり始めた。それ以外にも、ゆりちゃんと西ちゃんとはよく遊んだ。一緒に図書館に行って宿題をやったり、自転車にのってプールに出かけたり、街に出て買いものに行ったり、お泊り会をやったりした。夏生まれのわたしの誕生会まで開いてくれて、今年の誕生日はとても良いものとなった。

ほんとうに、楽しい夏休みだった。やっぱり正解だったんだ、とわたしは改めて思う。もう何回も、噛み締めるように繰り返し思ったこと。やっぱり、わたしは自分の権利を選んで、正解だった。

ニンのことを、考えないわけではなかった。でもわたしは、ニンのことを頭の隅に置くことにしていた。あくまでも、隅っこに。そうでないと、埒が開かないからだ。だから結果的に、わたしはどちらかと言えば、夏休みを懸命に過ごすことに精一杯だった。

数え切れないほど、笑った。いろいろなことを喋った、いろいろ

な思い出ができた。そうして、中学一年生の夏は過ぎていった。

ニンとは一度も、会わなかった。

15

陽射しこそつよいけれども、秋の気配をはっきりと感じる。空気のなかには寂しげな香りが混ざって、空は高く、どこまでも澄んでいる。あのぼやっと滲んだ、夏の空とははっきりと違う。

わたしは図形の問題の解説を聴きながら、空を眺めていた。鳥が飛んでゆく。ああどこまで行くんだろうなぁ、とぼんやり思う。

「高坂」

呼ばれてわたしは、返事をする。おうぎ形の半径を求めよ、とのことだった。わたしは立ちあがり、ゆっくりと歩いて、あくまでも冷静に式を書いてゆく。わたしはやっぱり、優等生の高坂さんだ。

「おっ、これが解けるか。よく勉強してるんだな、高坂は。よし、いいぞ」

わたしは小さく微笑んで、席に戻る。そしてまた、空を眺める。

こんなようなこと、前にも何回かあった。夏休み前、わたしはよくこうしてぼうっとしていた。あのときと、なにも変わっていないように見える。授業は退屈で、空は青くて、わたしは空を眺めていて。でも、さまざまなことが変わった。ひっそりと、しかし確実に。

授業が終わると、お弁当の時間だった。わたしと西ちゃんはいすをもって、ゆりちゃんの席に集まる。とくにそう決めたわけではないけれど、自然とそうなっていたのだ。

「やっぱり由美ちゃん凄いよね。わたし、あの問題危なかったよ」

西ちゃんが、感心したふうに言う。

「いやでも、わたしぎりぎりだったよ」

わたしは笑って返す。

「えー、嘘ついて。そんなことないんでしょ」

「ほんとだよ」

笑いながら、言いあう。ゆりちゃんはおっとりと微笑んで、話に加わってくる。

「先生も、褒めてたよね」
「あーあ、数学できるとかうらやましい。わたし苦手なのかなぁ」
じゃあ今度また勉強会をやろうよ、という話になり、いいね、とわたしたちは盛りあがる。
ほら、やっぱり。わたしはこころの隅で思う。やっぱりいろいろなことは、すべては、変わった。春の今ごろは、ニンと二人で、苛々しながらお弁当を食べていた。それが今では、こんなに楽しい。こんなにも、わたしに相応しい。
わたしが、手に入れた日常。
西ちゃんが冗談を言って、わたしたちはくすくすと笑う。お弁当を食べることも忘れて。こういった毎日が、わたしはほんとうに好きだった。

16

その日の午後、わたしは体調が悪くなって、保健室に行った。わたしはたまにお腹の調子を崩して、だから保健室の先生と顔見知りになる程度には、保健室に通っていた。

わたしはソファに座って、ひざかけをかけてクッションを抱いていた。保健室の冷房は、控えめで助かる。教室は寒すぎるくらいで、だからたぶん、今日もこうして保健室にくるはめになってしまったのだ。

そうは言っても、わたしは保健室が嫌いではない。小さく流れるオルゴールの音楽、空気清浄機のたてる唸り声、清潔な空気。

保健室の先生は、まだ若い女の先生だ。めがねをかけていて、わりあい美人、だと思う。ざっくりとしている人で、だからわたしはこの人のことが、教師にしてはけっこう好きだ。

先生は職員机に向かって、パソコンを開いて何か仕事をしている。わたしのほかに、生徒はきていないみたいだった。穏やかに、ゆっくりと、時間は過ぎていった。

体調もだいぶ落ちついてきて、この平和な時間を楽しむ余裕が出てきたとき。

「どう高坂さん、調子は？」

先生が、話しかけてきた。わたしはちょっとびっくりするが、だいぶ良くなりました、と答える。

「そう、良かった。ねえ、隣座って良い？」

言いながら立ちあがって、返事を待たずにわたしの隣にどかんと座る。わたしはすこし、緊張する。この先生はやっぱり、先生らしくないところがある。

「あー、こういうときって、たばこ欲しいね」

「あの、先生がそんなこと言って良いんですか？」

「良いの良いの。先生だって人間よ」

手ぶりを交えて、先生は言う。わたしはそれがおかしくて、すこし笑ってしまう。
「でね、高坂さん」
先生は急に、真面目な顔になって言う。
「高坂さん、安田さんのことは知ってるよね？」
返事が一拍、遅れた。はい、とわたしは言い、静かだったこころのなかに、かすかにさざ波がたちはじめる。
「うん、それで、ちょっと気にかかってることがあってね」
やっぱたばこが欲しいなぁとひとりごちてから、先生は話を始めた。
ニンがよく、保健室にくるようになったこと。そしてときおり、愚痴をこぼすようになったこと。その愚痴の内容について、先生は触れなかった。
ニンはしかし、話の最後にいつもこう言うそうだ。視線をじっと据えて、かたくなに、主張するように。
『でもあたし、友達はいるよ。四組の由美ちゃん』
そしてその後、わたしとの思い出話をするのだという。遠足のことや運動会のこと、家で遊んだこと、一緒に川へ遊びに出かけたこと。ほんとうに、他愛ないことばかりだそうだ。
「……あの、」
区切りがついたところを見計らい、おずおずとわたしは言った。
「安田さん、何か言ってましたか。その、わたしについて、他に」
「いや、それ以外は何も言ってなかったよ」
先生は否定するが、ほんとうのところどうなのだろう。ニンはわたしについての恨みつらみを、先生に言っているのではないだろうか。あれだけ悪口を言うニンなら、やりかねない。
先生は、こう話を締めくくった。
「何か心配なんだよね、安田さんのこと。無理してるみたいに思える。だから高坂さん、よく面倒見てやってよ」
はい、とわたしは答えた。その返事はどこか空虚に響いた。

そのときチャイムが鳴った。頼むよ、と先生はわたしの肩を叩いて、微笑んで立ちあがった。わたしはきっと、そのときうつろな目をしていたと思う。

17

つぎの社会の時間、教室に戻ったわたしはじっとして、ニンのことを考えていた。かたちだけ開いた、教科書とノートの前で。

『でもあたし、友達はいるよ。四組の由美ちゃん』

舌ったらずに言い切るニンの声で、その言葉は聞こえてくる。生々しく。

その言葉は衝撃的だった。ニンがそういうふうに思っているなんて、思わなかった。もちろんつよがりの可能性はある。でも何にせよ、ニンがわたしのことを「友達」だと言い切るのは、ほんとうに、意外なことだった。

だってすくなくとも、わたしはもう、「友達」だとは思っていなかったら。過去の存在となっていたから。

保健室の先生から聞いた話を思い返して、わたしは久々に、ニンとの記憶に耽る。

そう、確か、川に遊びに行った、何回も。小学校の、四年生のころのことだ。

小学校の四年生の春、ひみつきちをつくろう、という話になったのだった。言い出したのは、ニンだった。その無邪気な提案は、しかしわたしを惹きつけた。ひみつきち、その響きには、何かとくべつなものがあった。とくべつで、わくわくするもの。それでわたしは大人ぶって苦笑しながらも、いいよ、と了承したのだった。

それで、さがしに行ったのだ。放課後をめいっぱいつかって、自転車に乗って、町じゅうを駆けまわった。家からもってきた水筒の水と、駄菓子屋で買った五十円ぶんのお菓子をもって、一生懸命に自転車をこいだ。わたしたちは、希望に満ち溢れていた。小学生だった。どこまでも、小学生だった。

そして四日めの日、わたしたちは、遂に見つけた。町外れに行ってみたときのことだ。

わたしたちの町の外れには、川が流れている。けっこう大きな川。コンクリートで固められている場所もあるけれども、じっさいは整備されていない場所のほうが大きな場所を占めている。人気はない。柵で閉じられているからだ。

でもさいわいなことに、柵はわりあい低かった。わたしたちは柵の前に自転車を停めて、柵を思い切りのり越えた。早くしないと、見つかったら大変、急いで急いで、そうやって笑いあいながら。

がしゃん、と柵が鳴る音と共に、わたしたちは内がわへと降り立った。意味もなく、ずっと笑いあっていた。まるで新大陸を発見した冒険家のような気分だった。

降り立った地点からは、急な勾配の坂がつづいていた。雑草が、元気よく生えている。慎重に降りて、コンクリートの道に辿りついたわたしたちは、走る。全速力で走って、ニンが追いつけなくて、早く、わたしは立ち止まって叫ぶ。由美ちゃん速すぎるよ、と追いついたニンは憮然として言う。

わたしたちはそこで立ち止まり、乱れた息と共に川を眺める。きらきらと光を反射して、ゼリーみたいだった。

がたんがたんと橋が揺れ、ぶおんと車のエンジン音が鳴り響く。もう、すぐそこは橋の下だった。わたしたちはどちらともなく、橋の下に歩いてゆく。

昼間だというのに暗く、じめじめと土の匂いがする。しなびたダンボールが、いくつも捨ててあった。誰が置いていったのか、土とこけまみれのたんすも置かれていた。頭上を通り過ぎる車の振動が、身体じゅうに伝わってくる。心地良い振動だった。

「ここだ、ここだよ、由美ちゃん」

ニンは興奮して言う。うん、とわたしも感動をもって言う。ここだ、という確信。

そして川の橋の下の小さく薄暗い一角は、わたしたちの、ひみつきち、となった。

そこまで思い返して、わたしはちらと時計を見る。授業が終わる

まで、まだあと十五分もある。わたし空に視線をあわせて、そしてまた、小学生の記憶へと戻る。

それからわたしたちは、毎日のようにひみつきちに出かけるようになった。ビニールシートを敷けば、そこは立派にわたしたちの空間だった。わたしたちは時間をかけて、漫画だとか、びい玉だとか、飴の入った缶からだとかをもち込んだ。百円ショップで掃除道具を買って、すこしずつ掃除もした。そんな努力のおかげで、ひみつきちはとても居ごこちの良い場所となった。そこでわたしたちはくつろぎ、長い時間を共有した。

そんなある日のことだった。もう季節は初夏へと移り、爽やかな風が川を吹きわたるころだった。わたしは、川を探検することを思いついたのだった。その提案を言うと、ニンは感心したように、いいね、と言った。そしてわたしたちは、橋の下の外へと出た。ぱあっと明るい光が染みた。

川はその日も、きらきらときらめいていた。しばらく歩くとコンクリートがなくなってきて、むき出しの土があらわれた。わたしたちは、背の高い草の間をかき分けて進んだ。

そしてふいに、景色はわあっと青くなった。広がる青に、息をのんだ。胸がうち震えた。

わたしたちは、砂浜に出ていた。灰色の砂一色の、砂浜。この場所はすこし出っぱっていて、川の中心に浮く島みたいになっていた。空が見わたせ、どこまでもどこまでもつづく川が広がっている。力づよく、川は流れてゆく。

青かった。どこまでも、青かった。

凄いね、とわたしは言った。ニンは一言、きれい、と言った。そしてこう言った。天国みたい。

記憶はそこで終わっている。ひみつきちは、夏に入りかけたころ、通りがかりのおじさんに柵を越えるところを注意されてしまって、それをきっかけに何となく行かなくなってしまった。暑かったし、わたしたちはその遊びに飽きつつあったのだ。

でも、あの青だけは、よくおぼえている。
窓ごしに見る青とは違くって、とわたしは目のまえの空をじっと見る。やっぱり、違う。この青もきれいだ、でも、ああやって目を刺す青とは違う。
そのときチャイムが鳴って、日直が、起立、と号令をかけた。わたしは真面目な顔をして立ち上がり、礼をした。ずいぶん長くニンのことを考えてしまった、とすこしばかり後悔しながら。

18

きっかけは、ささいなことだった。あっけないくらいに。
わたしはクラスで国語係をやっていて、その日、職員室に呼ばれたのだ。職員室は、クーラーがよく効いていた。はんこの押されたプリントが、どっさりと渡された。夏休みの宿題として出されていたプリントだった。チェックが終わったので返却してほしい、とのことだった。わたしは、はい、と感じ良く返事をした。それだけなら、何ともないはずだった。
「悪いんだけど、一組のぶんも返してきてくれない？　そのなかに一組のぶんも入ってるから、教卓のうえに置いとくだけで良いから。つぎ、一組で授業なのよ」
そう言う国語教師の前で、わたしは心のなかで動揺した。瞬間的に、激しく。まさかこんなときに、そのとき、がくるとは思ってもいなかった。けれどももちろん顔に出すことはせず、わかりました、とわたしは落ちついた声で言った。
プリントを抱えて廊下を歩いているとき、わたしはほとんど何も考えていなかった。意図的に、頭を空っぽにした。考えるのは、後でも良い。理由はできた。今はただ、勢いが必要だ。わたしはただ、どきどきしていた。でも平気な顔をしよう、ということだけは決めていた。
一組には、あっという間についてしまった。一瞬、足を止める。なかからは、爆発したような笑い声と、いやらしい響きの威圧的な声が聞こえてくる。その瞬間もうわかって、もともとわかってはいたけれどもわかって、わたしはいよいよ覚悟を決めて、小さく唇をかむと、大またで教室に入った。
「失礼します。国語のプリントをもってきました」
はっきりと述べて、しかし視線は、教室の中央へと行ってしまった。後ろの黒板の近くに人が集まっていて、そして。

すべてが、止まった気がした。
ニンの表情の、何て情けないことだろう。目はぎゅっと歪められ、泣きたいのか笑いたいのかすらわからない。唇はぽかんと開いて、でも、無理やりに口角をあげている。道化のような、表情だった。
ニンは後ろの黒板の前に立たされていた。そう、立っていたのではない、立たされていたのだ。それは「休め」の姿勢みたいに手を後ろにやっていることからもわかったし、それ以上に、ギャラリーの多さと、そこから漂うつよい威圧感からわかった。
道化の表情を浮かべるニンには、さまざまなものがじゅんぐりに投げつけられた。消しごむ、えんぴつ、ボール、紙パック、丸められた紙……顔、腕、胸、お腹、足、至るところに、ものは当たった。そしてニンの足もとに、それらのものものは溜まってゆくのだった。
わたしはニンから、目をそらす。そして教卓に向かって歩き、プリントを置く。注意深く、ゆっくりと。手が震えないように。
「おれ、つぎまぶた狙おっかなー」
男子がおどけて言うと、笑いが起こる。
「おまえチャレンジャーだな」
「だって得点高いじゃん」
どうやら、当たった場所によって「点数」がつくらしかった。確かによく見てみれば、机のうえに足をくむ女子のかたわらで、記録をつけているらしき女子がいる。
そして彼は、シャープペンシルをニンの目に向かって投げつける。ニンは反射的に目をつぶり、それをギャラリーたちはなじる。目ぇつぶってんじゃねえよ。シャープペンシルは、まゆげのあたりに当たった。それでギャラリーたちは機嫌をなおす。
平気なふりをしてプリントを揃えながら、わたしは、その場に崩れ落ちそうだった。
見ては、いけない。もう、見てはいけないと思った。わたしはこのまま、一組を去る。そしてすべてを忘れて、何ごともなかったかのように平和な毎日に帰る。それが良い。それが、賢明な選択とい

うものだ。
しかし、わたしは、視線をあげてしまった。教卓から、ニンをまっすぐ見てしまった。
ニンはわたしと目があっても、ぼうっとこちらを見るだけで、その不自然な表情を変えなかった。いや、おそらく変えることができなかったのだろう。曲げられた目のそのおくは、うつろだと思った。ニンははたして、こんな目をしただろうか。こんな、力のない、どこを見ているかわからない、かすんだ目をしていただろうか。
ニンはきっと、何も見ていない。
そう思って、ぞっとして、わたしは逃げるように目をそらし、早足で教室を出た。こんなときでも、失礼しました、と言うのは忘れなかった。そんな自分が、ほんのすこしだけ嫌だった。
忘れよう。そう自分に言い聞かせた。早く忘れるんだ。もうわたしには、何の関係もない。

19

しかし、忘れることは出来なかった。プールの授業が、あるのだ。二学期になったというのに。

移動の時間が恨めしかった。一組の前を通るたびに、それは聞こえてくる。はっきりと、細部までわかる。わたしは耳を、思いきりふさぎたくなる。でもそういうわけにもいかない。だって、隣にはゆりちゃんと西ちゃんがいる。

わたしはいつだって、いつも通りに笑っていたいのだ。ゆりちゃんと西ちゃんに、ニンのことを相談する気はなかった。それがなぜだかはっきりとはわからないけれど、たぶんニンのことは、わたしの心のなかの、とても深いところを占めているからだろう。

わたしは最近いつも、ニンとあの風景のことを考えていた。あのうつろな目。人懐っこいかつての目の輝きは、もうどこにも見られなかった。

ニンはきっと、わたしを恨んでいる。きっと、つよく、根深く。だってわたしが一緒にいれば、あんな境遇に置かれることはなかったはずだ。そう思うと、やけみたいな気もちになった。わたしが悪いのか、いや、わたしは何も、悪くない。わたしがどうしてそこまでニンに対して責任をとらなくてはいけないんだ。そんな必要ないはずだ。わたしはわたしで生きていたい。そうだ、ニンへの責任なんて、ない。わたしはわたしにとってのいちばん良い道を選びたいだけだ。

そう思うのに、自分を必死でかばうのに、一組の前を通るたび、あの嫌らしい盛りあがりを聞くたびに、心がつよく締めつけられて、拳をぎゅっと握ってしまう。酷い、と思う。酷い。ほんとうに、酷い。あの人たちは、酷すぎる。

そして、きこえてくるのだ。

『友達はいるよ。四組の由美ちゃん』

どうして自分が、ここまで悩むのか。悩まなければならないのか。でも苦しいのは事実で、わたしはもう、こんがらがってどうしようもなかった。でも表面ではいつも通り、笑顔で毎日を過ごすのだった。何ごともないかのように。

20

だからその朝、わたしは呼吸困難に陥りそうになった。秋風が吹く、涼しい朝のことだった。

ニンは、柵に座って待っていたのだ。かつてのように、あの失われた日常のように、でもどこか、影を濃くして。俯きがちな視線と伸びた前髪が、わたしをはっとさせた。

わたしはただ、立ち尽くした。頭がまっ白になった。どうしたら良いのか、まったく頭が働かなかった。ひんやりとした空気が、やけに生々しく肌に触れてきた。ニンは上目づかいにあちこちをきょろきょろと見て、そしてついに、わたしの姿を認めた。するとニンは、弱々しく、しかし瞳でにかっと笑った。まるでかつてのように。

そして、かすれ声で言うのだ。

「おはよう」

その言葉からは、わたしの思い込みだろうか、どことなく、嬉しさが感じられた。いやきっとわたしの思い込みだ、だってニンは、わたしを恨んでいるはず。

そう思うと、恨みごとでも言いにきたのかと思った。だからなのか、おはよう、と返すわたしの挨拶は、やけに冷たく響いた。直後わたしは思う。違う、そうじゃない。でもいったい、何が違うのかわからない。

ニンは立ちあがってわたしの前にきて、申し訳なさそうに言った。

「ごめんね、きちゃって。でも、ちょっと、一緒に行きたかったんだ」

うん、とわたしは頷いた。うってかわって、弱々しく。間近に立つと、ニンの目を、まともに見ることが出来なかった。あの空洞のような目、強張った表情、教室の声。視線をあわせるなんて、出来ない、だって。

わたしたちは、歩き始めた。淡々と、何も話さずに。ニンとの間

に流れる沈黙は、明らかに以前とは質の違うものだった。ひそやかで、不明瞭で、張りつめた沈黙。わたしは小さく、唇をなめた。
そうして沈黙を積もらせていると、ニンはふいに、口を開いた。いつかと同じに、ゆっくりと、噛み締めるように。
「あのねぇ、今日きた理由、ごめんね、悪いとは思ったんだけど、由美ちゃん誕生日だったでしょ、で、プレゼント、渡せなかったから」
不意うちだった。
その言葉は、思わぬ角度からわたしの胸をつき刺した。わたしは言葉にならない声を、あ、と漏らしたきりで、あとは何も言えなかった。心臓の鼓動が、身体じゅうに響きわたる。
息苦しかった。例の、息苦しさだ。でも、いつもよりもずっと密度が濃くて、ぎりぎりと容赦なく、わたしを締めつける。
ニンはそんなわたしの様子に気がつかないようで、かばんをごそごそとやっている。歩いている途中なのに、人の目なんか構わず。そして何かを取り出すと、わたしの手をぎゅっと掴んで、それを握らせる。柔らかい、布と綿の感触がした。そしてそれ以上に柔らかく暖かいニンの手。
「これ」
わたしは呟くようにきく。
「みてみてよ」
ニンは手を離し、嬉しそうに言う。わたしは手のひらをそっと開いて、それを見た。
にんじん、だった。いさましい顔をして笑っていて、でもだから、やっぱり滑稽な、にんじんのマスコット。
息を呑んで、わたしはそれを、じっと見つめた。胸がいっぱいで、自分が何をどう感じているのかさえわからなかった。
「ごめんね、こんなのしかなくて、でも、これ、良いなぁって、あたし思って」
言い訳するように、ニンは言う。わたしはそこで、せつなくなる。

どうしてそんな、弁解するように言うんだ。そんな、媚びるように、卑屈に。
わたしはにんじんをそっと握りしめ、かろうじて言う。
「ありがとう」
にんじんをつよくもつ手は、自分の心をも握りしめているようだった。手がすこし、震えているのがわかった。
わたしは、恨まれてなどいなかった。
ニンは、あたたかな気もちを、このにんじんに託したのだ。
今すぐニンに、謝りたかった。ごめん、と謝りたくて、何回でも謝りたくて、このにんじんを大事にしまいたくて、ごめん、ニンに、そう言いたかった。ニンの強張った笑顔を想い、ニンの痛みを想い、ニンのことを想い、ごめん、やっぱり、そう言いたかった。そんなの、無責任すぎるのかも知れない。馬鹿らしいってこともわかってる。でも、わたしの気もちは、そう叫んでいた。
『友達はいるよ。四組の由美ちゃん』
ニンは、心の底からそう言ったのだ。
そして、プレゼントまで用意して、
わたしを恨んでいたわけでは、なかったのだ。
ではニンは、いったいどういう気もちだったのだろう。わたしに裏切られ、見捨てられ、ひとりぼっちで、そうだ、お弁当だって帰り道だってニンはひとりだったのだ、そんななかでわたしへのプレゼントのことなんか考えて、馬鹿だ、馬鹿じゃないのか、そう言いたくなった。わたしのことを友達だと信じて、やっぱりニンは、馬鹿だ。泣きたいほどに、せつないほどに。
でも、口はわずかに震えるばかりで、決して開くことはなかった。いまさら、謝罪？　虫が良すぎる。そんなの、なしだ。
それに、ニンとこれから以前のように仲良く出来るかというと、それはまた、べつの問題だ。
そう思っている自分にはっと気がついて、でもそれはどうしようもなく事実で、何だかもう、すべてのことにうんざりしてしまいそ

うだった。
ごめん、ニン。
隣を歩くニンに、無言ですがりつく。
ニン、ごめん、わたしなんかが、おさななじみで、ごめん。もう仲良く出来なくて、ごめん。こんなことになってしまって、ごめん。プレゼント、もらっちゃって、ごめん。
泣きたくなった。でも、そんなずるいことは出来ないとわかっていたから、わたしはただ、俯いて黙々と足を進めた。
校舎は、もう目のまえにそびえ立っていた。刃物のような喧騒が、今日も校舎をとりまいている。

21

チョークは硬い音をたて、教師の声はとうとうと教室に響きわたる。今、何の時間だっけ。ふと思って開いた教科書に視線をやって、あ、数学か、そう知った。

授業なんて、ぜんぜん頭に入らない。今が何時間めなのかすら、あやふやだった。わたしはただ、頬杖をついてぼうっと空を眺めるばかりだった。

青い。

今日の空は、くっきりと青かった。雲ひとつなく、広がる空。高く高く、はるか高く。吸い込まれそうだった。青が、目に痛い。

この青で、良いのかなぁ。

わたしは机の下に置いた手でにんじんをぎゅっと握って、ニンに心のなかで話しかける。

天国の青って、わたしやっぱり、わからないよ、でも、ニンにわかってわたしにわからないことがあるなんて、そんなの認めたくなかったし、だからわたしは、天国の青を、否定しつづけていた。

でも、ニンにわかって、わたしにわからないことも、あるのかも知れない。

だってわたしには理解出来ない。どうしてあんな仕うちをされて、誕生日プレゼントを渡そうだなんて思えるんだ。そんなの、ない。恨んでくれていて、良かったんだ。だってそっちのほうがよっぽど自然。

でも、ニンは、そうしなかった。そして今でも無垢な目で、わたしを嬉しそうに見るばかりなのだ。

わたしはいよいよ、両手で頭を抱えてしまった。

ニン。

わたしはどうすれば良いの。そもそも何が悪かったのか、じっさいわたしが悪かったのか、それすらほんとはわからないよ、だって。

だって。

それ以上は、言葉にならなかった。わたしはじっと目をつぶり、青を見ようと試みた。天国の青を。現実にない、その色を。

22

ニンに、謝ろう。
繰り返し繰り返し、そう思った。
でも謝って、そのあとはたしてどうすれば良いのかわからなかった。以前みたいに、仲良く出来るのか。仲良くしてしまって、良いのか。
それにいくらなんでも、虫が良すぎる。わたしはニンを、捨てたのだ。置いていったのだ。いまさら許してだなんて、そんなのずるいに決まってる。
考えた。
ひたすら、考えた。
一週間たって、わたしはようやく結論を出した。
わたしは雑貨屋で、もらったのとまったく同じにんじんのストラップをさがして買って、メモ書きと共に、下駄ばこに入れた。
「ごめん」
そう一言、書いて。

そしてつぎの朝、ニンから、返事がきた。それは下駄ばこのなかで、ひっそりと待っていた。

「由美ちゃん

由美ちゃんに手紙を書くのは久しぶりだから、ちょっときんちょうしているかもしれないです。
あたしもごめんと言いたいです。由美ちゃんにあたしがつりあわないことってわかってました。でも由美ちゃんやさしいから相手してくれてたんだなと思います。悪いなと思います。
あたしは由美ちゃんが好きです。こんなこと書くから嫌われちゃ

うのかもしれないですけど、でもそうなんです。由美ちゃんはあたしの手のとどかないところにいて、あたしはいつも由美ちゃんにあこがれていました。だから一緒にいれてよかったと思います。友達になれてよかったと思います。

あたしみたいな子はいないほうがよかったんだと思います。でもどうすればいいのかわからなくて、ごめんなさい。それくらい自分で考えろっていうことなのかな。

由美ちゃんほんとに、ごめんなさい。あたしの相手してくれてたんだよね。わかってました、なのにはなれられなかったのはあたしです。悪口をいっぱい言ったのもよくなかったなと今では反省しています。由美ちゃんは悪口とか好きじゃないのに。でも、そうすれば由美ちゃんが私にすこしきょう味をもってくれるかなって思って言いました。でも反省しています。

反省してます。ごめんね。

ごめんね。

あたし何でこんなに、だめな子なのかな。泣けてきます。

春奈」

思いきり、殴られた気がした。ニンの純粋さに。ニンの想いに。

ニンはどうして、わたしなんかを慕うんだ。

それがわからなくて、わからないから、ただひたすらにせつなくなった。

そして、思った。

ニンときちんと、話さなきゃ。

ニンに、向かいあわなきゃ。

だってニンは、ぜんぶの想いをわたしにぶつけてくれたのだ。わたしはそれに、応えなければいけない。応えたい。

23

わたしは教室に荷物を置くなり、一組に向かった。
とにかく息が、痛いんだ。いちいち胸に刺さって、染みて、もうこんな痛いのは、嫌だ。胸の鼓動が喉のおくにまで伝わってきて、気もちが悪くて、嫌だ。もうこんなのは、嫌だ。
気がつくと、一組の前にきていた。にんじんを握った左手に、ぎゅっと力を込める。わたしは窓ぎわの壁に寄りかかり、ガラスごしに一組のようすを見る。
もうたくさんの生徒が登校しているようで、たくさんの背中が、見えた。女子も男子もいる。彼らは大きい笑い声をたてて、盛りあがっている。
「何言っても、ごめんなさいって言うんだぞ」
「ごめんなさい」
全身が、緊張した。ニン。
「早えよ。まだいいんだよ」
「ごめんなさい」
「お前さぁ、臭いんだよ。謝れ」
「ごめんなさい」
「ウケるー。マジ存在がウケる」
「ごめんなさい」
「目障りなんだよね、クラスの害虫」
「ごめんなさい」
「消えろ」
「ごめんなさい」
「存在自体が許せない」
「ごめんなさい」
「ニン！」
わたしは、叫んでいた。喉の奥底から、心の奥底から。

たくさんの瞳が、わたしを見据える。刺すような、傲慢な視線。
ああ、こんなのに毎日、ニンは晒されていたのか。
わたしは教室に勢い良く入り込み、あっけにとられている彼らをかきわけ、ニンを見つける。
ニンは床に、正座していた。心底驚いたように目を丸くして、由美ちゃん、と小さく言う。わたしはそんなニンの腕をつかんで、無理やり立たせた。
「行こう、駄目だ、ニン、ここにいちゃ駄目」
わたしはそれだけ言うと、強引に歩き出した。ニンはよたよたとした足取りで、しかしきちんと、ついてくる。わたしたちが教室から出た瞬間、はぁ、意味わかんねー、と、一斉に、悪意が鳴った。
プールへとつづくガラス戸を開け、外に出る。
わたしたちはそして、走り始めた。ニンの腕を、しっかりと掴んで。ニンは何も言わず、ついてきた。
プールの裏へとまわり、フェンスにとりつけられたドアを開け、わたしたちは、外の世界へと出て行った。

24

わたしたちは、しばらく走った。言葉は何も交わさなかった。ただ間には、互いの体温だけがあった。あたたかくて生々しい、ニンの腕。

勢いにまかせて足を動かしながら、わたしは思う。

わたし、きっと、頭がおかしい。あんなことしちゃって、明日からわたしは、転落すること決定だ。今までつくりあげてきたもの何もかも投げ出して、馬鹿だ、わたし、最悪で最高の馬鹿。ばかばかしいくらいに、馬鹿。

でも何故か、久々に、気もちは爽やかなのだった。どこまでも走ってゆける気がして、わたしはじっさい、どこまでも走った。

ニンはしかし、ぽつりと訴えた。

「疲れた」

「まったく体力ないんだから」

わたしは立ち止まって、呆れたように言う。あれ、いつも通りだ。そう思った。いつも通り。

わたしもニンも、息が荒れていた。激しい呼吸のなかで、ニンは言う。

「ここ、ひみつきち」

わたしたちは、川のそばの道にいた。もちろんわたしが、連れてきたのだ。川は一面に、広がっている。どこまでも透き通って、どこまでも遠くにつづいている。

「そうだよ。ひみつきち」

「……由美ちゃん、何で、」

「わかんない。わたしって馬鹿だよね」

それは本音のはずで、ほんとにわたしは洒落にならないことをしたはずで、それはわかっているはずなのだけれど、こうして広い空

のもとで太陽を浴びて、そしてニンとふたりでいると、何だかどうでも良い気がしてきてしまうのだった。
だからわたしは、ますます自分に呆れて苦笑する。
「わたし、ほんとに馬鹿だ」
言った言葉は、しかし嬉しそうに響いた。ニンは心配そうに、わたしをうかがい見る。
「ほんとに馬鹿だ！」
わたしは叫ぶように言って、フェンスを乗り越え始める。ニンは慌てて、ついてきた。
わたしたちは橋の下を通り、草をかきわけ、そしてあの、小島に出た。
そして、わたしたちは青と立ち向かう。
ざぁっ、と光の溢れる音がした。強烈で、鮮烈で、どこまでも青い、青くて青くて青い青。
うつくしかった。この世のものでは、ないみたい。
じわり、とふいに青が滲んだ。
「由美ちゃん」
「ねえニン」
わたしは、涙声にならないように気をつけて言う。
「これかな、天国の青って、これで良いのかな、わたしずっとないって思ってたんだけど、この、こういうので、これで、良いのかな……」
「……たぶん、わかんないけど、でもね、多分、これくらい、きれいだったよ」
わたしは指で目頭をぬぐって、馬鹿、と言った。
そうだ、わたしたち、二人とも、馬鹿だ。
空はやっぱり、青かった。でもこんな青、見たことなかった。新しい、青だった。
ああ、たぶん、これが。
青はただ、そこに広がっていた。わたしはニンの手をぎゅっと握

って、大丈夫、と思った。大丈夫、この青に誓う、わたしはもう、負けたりしない。

これが、わたしの選択なんだ。

そう思った途端、青は、色あいを変えた。これだ、そうだ、これなんだ、この青。わたしは思って、その青を目に焼きつける。ずいぶん久々に、混じりけのない気もちで。

完

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8446q/

ヘブンリー・ブルー

2011年3月18日22時25分発行